

ずいそう

帆船模型

近 藤 敏 夫



通勤電車に乗らなくなってかなりになる。現役時代、機械振興会館には協会の建設業部会で色々お世話になった。協会の懇親会で地下のレストランの名物のカミカツを思い出す。

後日ウィーンで名物のウィンナーシュニッツェルを食し、カミカツのルーツに思い当たった。

ここでは現在夢中になっている「帆船模型」を中心に、出身の「尾道」また「海」「ホーンブロワー」について随想してみる。

生まれて大学に入るまで尾道の海辺で育った。実家は、石造りの階段が湾になった「雁木」の港に面している。



子供の頃、夏は水着で家を出て、そのまま海岸通りを横切ってすぐ海に飛び込んだ。祖父が釣ったタコを薪木に巻き付けて家まで走ったこともあった。母親の実家の島から船で送られてきたミカン箱が雁木に係留された船から、雁木に渡した渡し板の上を運ばれていたのを思い出す。

実家の隣は「ろ」屋さんだった。「ろ」とは例の伝馬船の艦で八の字を描いて船を進める別名「オール」の「ろ」である。奥深い、薄暗い家の中に長い木材が積まれていたのを記憶している。当時はまだ「ろ」がよく使われていた。現在では尾道では向島に1軒だけ「ろ」屋さんが残っている。

実家の二階から見える向島の造船所には南極で鯨を仕留めるキャッチャーボートが多く繋がれていた。造船所の斜路から滑り降りた船をタグボートが狭い水路

で引き回していた。

尾道の記憶は年齢を増すごとに鮮明に強く心に響いてくる。

大学を出て建設会社に就職した。当時は浚渫がピークの頃で日本中で浚渫、埋め立てをしていた。

会社では最初、浚渫船に勤務して、その後山岳トンネルなどの陸上土木の現場に行ったこともあるが、陸上の現場ではなぜか体調を崩したりしたこともあり、散々な目に遭った。今では、やはり自分は陸上で無く「海」向きの人間だと思っている。

後年、技術開発が盛んな頃、水中ロボットにも関わり、「個人的な動機、自費」で潜水士の免許も自主的に取得した。会社の製作した技術紹介のビデオに、私が海中でロボットを動かしているシーンが残っている。ちなみに編集に立ち会った「広報部」の仲間には「トドが泳いでいる」と散々だった。

この頃、会社は浚渫、捨て石均し工事等の水中機械化施工に力を入れていた。

入社5年目にシンガポール勤務になった。初めての海外勤務で当時はシンガポールも若く、(日本に学べ)のスローガンで活気ある時代で、初めての海外勤務の身には刺激的でその後の大きな財産となった。今、ジュロン港の活気を見ると、日本はすっかりお株を取られたような気がする。

当時会社ではジュロン港の拡張工事、陸上では住宅局の基礎工事に多くの若い技術者が働いていた。

上司から海洋冒険小説ホーンブロワーシリーズを紹介されて、読んですぐ虜になった。

「血湧き、肉躍る」冒険、戦闘の臨場感、主人公の内面描写の巧みさ、に魅せられた。この度ネットで一冊購入し3日で読んでしまい(約40年ぶり?), 勢いでシリーズ全10冊を全て読み切った。

ここ20年? 小説は読まないことにしていたが、ホーンブロワーは別物である。

シンガポール時代と帰国後の数年はホーンブロワーとその後はボライソーシリーズに夢中になった。

この度、随想を書くということでボライソーを約

40年ぶりに読み返したが、やはり「血湧き、肉躍る」冒険とホーンブロワーの世界にすっかり夢中になった。作者のC. S. Foresterは1966年、記者の高橋泰邦も2015年に逝去している。私がホーンブロワー・シリーズに夢中になって、訳本の出版を待ちながら読んでいたのが80年代初めで、高橋泰邦さんも翻訳に一生懸命だった勘定になる。

シンガポールで通っていた英会話教室でイギリス人の先生に「DREAMについてしゃべれ！」と言われ、「アラスカで、昼はキングサーモンを釣り、食事は同行の中華のシェフ4名（北京、上海、広東、四川）の料理を食し、夜はホーンブロワーを読みたい」と言うのと、先生が大受けして喜んでくれた。

ちなみにイギリスのウィンストン・チャーチルもホーンブロワーを読んでいたらしい。

先日、横浜に帆船模型展を見に行った。

日本で約40年前に帆船模型の同好会を立ち上げたメンバーの一人の故白井一信さんの「華麗なる帆船模型」という展示会で、会場では白井未亡人と娘さんのお二人が留守番をされていた。

白井一信さんは日本の「帆船模型」を確立した「神」と言われている。日本中には現在、帆船模型の「モデラー」クラブ会員が東京の帆船模型製作同好会 ザ・ロープの130名を入れて、約550人居る。（無所属を数えると数倍？）白井一信さんと40数年前に東京に帆船模型製作同好会（ザ・ロープ）を創設したメンバーも高齢ながら元気で頑張っておられる。

模型帆船を作っている人（モデラー）にはホーンブロワーがきっかけでこの模型を作っている人が多い。またこの架空のヒーロー、ホーンブロワーが物語の中で乗船し指揮した帆船「ホットスパー」も過去には模

型キットとして販売もされている。

私は三年前にたまたま新聞で「帆船模型の展示会」の開催を知り、これに行って本格的帆船模型の美しさに圧倒され、その場で「製作教室」への入会を申し込んだ。

我々がよく目にするのは、土産用の帆船模型である。私は約十年前にベトナムを旅行中に帆船模型の専門店に連れて行かれ、ここで長さ約1mの戦艦の帆船模型を一万円で購入し、日本に持ち帰った。

帰国後、細部のおかしいのに気づき部品を銀座で購入し補修を試みたが、途中で投げ出した。

お土産用の帆船模型と本物の帆船模型の違いはザ・ロープの「製作教室」で初めて実感した。

クラブのベテランの帆船模型への情熱、こだわりは想像を超える。クラブ入会時、数年もすれば…と密かに考えていたが、この（甘い）考えはベテランの模型を見て打ち砕かれた。クラブの研修会で披露される彼らの模型に対するこだわり、執念、愛情には毎回打ちのめされ、勇気づけられる。

この「情熱、こだわり」のFeverに当方は現在、完全に感染してしまった。

ベテランの高度な模型は製作に数年かけるのは当たり前で、その細部に対するこだわりは異常とさえ思えるようなものがある。この細部は裸眼では見えない…虫眼鏡無しでは見えないものもある。

模型を前に嬉々として、製作にかけた情熱をベテランから聞いていると、本当に羨ましくなる。

シニアの人たちが「遊びです。」と言いながら熱っぽく語る模型論を聞いていると、聞いているだけで同じこだわり、興奮、労力、疲れのFeverにこちらもどうしても入り込みたくなる。

帆船模型製作には多くの課題、要素がある。たとえば、船体（外板張り、デッキ張り…）艀装（大砲、階段…）等々、あるいは塗装や木工工作等についても多くの課題がある。これらのまとまりとして一隻の帆船模型が出来上がる。一人前のモデラーになるにはこれらの課題の習得が必須となる。

帆船模型には過去に実在したモデルがある。

英国ポーツマスのHMS VICTORY、英国グリニッジのCUTTY SARK、米国のUSS CONSTITUTIONが有名であるが展示館としてきれいに整備されており、観光資源として活用されている。日本では石巻にサンファンパウチスタがあるが、老朽化による補修費で悩んでいるとか？

これら帆船を忠実にスケールダウンしてこの美しさ



を再現製作する作業が楽しい課題であるが、またこれらの船の時代考証も帆船模型製作に付随する大きな知的な楽しみである。活躍した時代の世界の状況…日本の状況…文化、科学技術の状況などである。

今年、「バウンティ号の反乱」で有名な Baunty's Launch を製作している。「バウンティ号の反乱」は1789年4月に実際に起きた事件で、艦長 Bligh が書いた日誌が残っていたから有名になった。これを基に1932年に小説がでてヒットしている、この反乱は歴史上有名なロシアの「戦艦ポチョムキンの反乱」と並び称されるとか？その後1935年にクラーク・ゲーブル主演で映画化、その後マーロン・ブランドでも映画化されている。この度私はクラーク・ゲーブルの映画を見て興味が増して、関係する書物をいろいろ入手した。Bligh の書いた記録 (The Journal of Baunty's Launch) が製本販売されているのを知り取り寄せて読んでいる。

1789年4月28日早朝 Bligh を含む19名が23ft ランチで戦艦バウンティから追放され48日の漂流に出

ている。19名の搭載で乾舷が6インチで48日漂流???

模型を作るのはもちろん楽しいがバウンティのように歴史を遡り、その時を体験できることが大変な楽しみ、喜びになる。

Bligh 艦長の書いた log で19名が乾舷6インチのボートでどのような航海をしたのか興味は尽きない。

今の Launch を仕上げたら Viking 船を作ってみたい。鎧張りの船体は本当に美しい、London Greenwich の Cutty sark の Launch も美しい、どのように外板を張り合わせるとあのようなになるのかわからない。

Stockholm に16世紀に沈没して、333年後に引き上げられ元の船体が95%残っている帆船がある。

この船も調査に行かなければいけない？

帆船模型の趣味、遊び？に終わりは無い…。

リタイヤ生活も結構忙しい、面白い、悪くないぞ！

——こんどう としお (元) 五洋建設株——

